

じゅうごろうあなよこあなぼぐん
十五郎穴横穴墓群

—日本最大規模の横穴墓群—



◆ 遺跡の位置・規模

奈良時代に中央から地方へ派遣された役人や地元の有力者やその家族が亡くなると、崖面に横穴を掘って造られた墓(横穴墓)に埋葬されました。大字中根の虎塚古墳の存在する東中根台地の崖面には、約1.5kmにわたって、凝灰岩を掘り込んで「十五郎穴横穴墓群」が築かれています。この凝灰岩の露頭は、本郷川を挟んで東中根台地と対岸台地の数kmにわたって見られますが、横穴墓群は本郷川右岸の東中根台地のみに造られました。この横穴墓群は、奈良時代を中心に約1世紀にわたってこの地に次々と造られ、日本で最大規模の横穴墓群と考えられています。

◆ 横穴墓群の分布

この横穴墓群は、谷津を挟んで3つの支群に分かれて分布しており、北から指涉支群(虎塚古墳のある台地)、館出支群(虎塚古墳2号墳のある台地)、笠谷支群(東中根台地南端)と呼ばれております。十五郎穴横穴墓群の一部は、古くから既に開口しており、江戸時代の水戸藩の学者などが紹介しています。このうち館出支群の一部(34基)が、昭和15(1940)年に県指定史跡に指定されています。館出支群32号墓からは、昭和25(1950)年に市指定文化財の銅製金具の方頭大刀が出土しており、正倉院御物の大刀との類似性が指摘されています。

◆ 横穴墓の構造

横穴墓は、一般的に遺体を埋葬する「玄室」、玄室に通じる「羨道部」、入り口前の「前庭部(墓前域)」に分けられますが、羨道部が明確でない小規模なものなどいくつかのタイプがあります。玄室の平面形も正方形、フラスコ形、長方形などいくつかの形態があり、また、棺台を持つものもあり、埋葬方法に違いが想定できます。羨道入り口は大きめの蓋石や板などを用いて閉じられていたと考えられています。

◆ 過去の調査

昭和51～55年に行われた指涉支群の発掘調査では、119基の横穴が確認されました(このほかに北側に離れて1基存在)調査した横穴墓のほとんどは盗掘を受けていましたが、人骨のほか須恵器や勾玉・切子玉などが出土しました。この発掘調査を実施した区域は、シートにより被覆し保護されています(見ることは出来ません)。

◆ 確認調査の成果・特徴

横穴墓群の広がりなどから、その総数は300基を超えると推測されておりますが、台地斜面部は樹木に覆われており、遺跡の明確な範囲や総数などはよく分かりません。横穴墓群の規模等を把握することが課題となっており、平成19年度から遺跡の範囲等を確認するため、確認調査や全体地形測量を実施しています。

平成20年度の調査では、北限の横穴墓が確認され指涉支群の第121号墓となりました。平成22年度からは試掘調査も行っており、館出支群から未開口の横穴墓が新たに発見され、平成23年度にこの横穴墓の発掘調査を行ないました。

その結果、玄室から金銅製金具のついた刀子(小刀)と県内2例目となる蕨手大刀が出土しました。このような飾り金具のついた刀子が、完全な状態で発掘調査により出土した例はなく、類例は奈良市東大寺の正倉院に納められている刀子しかない大変珍しいものです。このため、この横穴墓に埋葬された被葬者が、当時の中央とつながりのある高い身分であったことが推定されます。

玄室からは、人骨が数体分と鉄鏃19点、鉄釘144点が発見され、墓前域及び羨道部からは、須恵器の坏・蓋・盤・高坏などが合計57点出土しました。これらの出土品からこの横穴墓は、奈良時代に使用されていたことがわかりました。